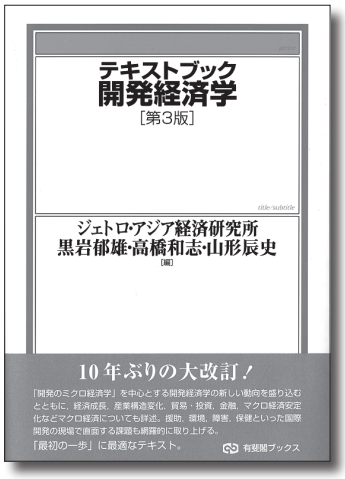
■山形辰史■

# 黒岩郁雄・高橋和志・山形辰史編『テキストブック開発経済学［第3版］』

有斐閣　二〇一五年




## 開発経済学の今昔物語

開発経済学は、開発途上国の置かれた環境の変遷に応じて、変化を遂げてきた。戦後、東西冷戦に対して多くの開発途上国は「第三世界」の立場を取り、市場経済のみならず計画経済にも一定の理解を示した。これらの国々は五カ年計画を作成し、政府のビッグ・プッシュによって、経済が貧困の罠から抜け出すことを期待した。ビッグ・プッシュを裏付ける複数均衡は、外部性によって説明された。その後、一九六〇～七〇年代に、当時は小国（経済）とみなされていた韓国や台湾、シンガポール、香港が、海外の需要に応える（輸出）ことで所得を拡大させていくと、国際経済学が開発経済学に取り入れられるようになった。

一九七〇年代末の第二次石油ショック以降、開発途上国の公的債務がかさんでくると、国際金融論が開発経済学に組み入れられた。そして規制緩和、民営化といった公共経済学の視点が導入された。また、一九八五年のプラザ合意以降、日本円を始めとする東アジアの通貨が切り上げられ、同地域のドル建て所得が上昇すると、この地域の典型的企業の同族経営や経済主体の長期的関係を説明するために、ゲーム理論が応用されるようになった。さらには、これら地域で進行していた技術革新や技術移転を説明するために、経済成長理論が援用された。

そして二一世紀に入ると、ミレニアム開発目標や貧困削減戦略書（PRSP）等に成果主義が導入され、目標達成の成否や援助の効果の有無を判断するために、ミクロ計量経済学が重用されることとなった。

このように開発経済学は、時代の要請と共に変化してきた。換言すれば開発経済学は、開発途上国の開発のあり方に規定されて、拡大してきたのである。とするならば、今後の開発途上国が直面する課題を先取りすることが、未来の開発経済学に求められる。

## 未来の開発経済学

近未来において、国際開発はどのように変わっていくだろうか。当然、環境問題は喫緊の課題として浮上する。今年九月に、国連が主導して達成を試みていたミレニアム開発目標が、「持続可能な開発目標」（Sustainable Development Goals）によって置き換えられることも、環境問題への取り組みをより促進することであろう。さらには、多くの開発途上国が豊かになり、ビジネスのひとつの極として、世界経済のなかで大きな位置を占めるようになってきている。したがって、貿易・投資・金融・技術といった側面がこれまで以上に重要性を増そう。

これらの観点を反映し、一九九七年に初めて出版されたアジア経済研究所の『テキストブック開発経済学』は、二〇一五年、第3版として新たに編集された。貧困、格差といった課題を正面に据え［第1部　開発と人間］、それらが解消されていくメカニズム（経済成長、貿易・投資・技術革新）を紹介し［第2部　開発のメカニズム］、そのメカニズムを能動的に引き起こしていく戦略や政策について議論した［第3部　開発への取り組み］。以下が、同書の構成である。

**第1部　開発と人間**

第一章・貧困と不平等（高橋和志）、第二章・二重構造と労働移動（寶劔久俊）

**第2部　開発のメカニズム**

第三章・経済成長（山形辰史）、第四章・人的資本（伊藤成朗）、第五章・貿易（石戸光）、第六章・海外直接投資（田中清泰）、第七章・技術（鍋島郁）、第八章・産業連関（猪俣哲史・孟渤）、第九章・制度（湊一樹）

**第3部　開発への取り組み**

第一〇章・貧困削減戦略（高橋和志）、第一一章・政府開発援助（山形辰史）、第一二章・農村金融（塚田和也）、第一三章・マクロ経済安定化（国宗浩三）、第一四章・経済統合（黒岩郁雄）、第一五章・環境（小島道一）、第一六章・障害（森壮也）

## 未来の「開発」とは？「貧困」とは？

交通手段の発達により、緊急支援物資が届きやすくなったので、現代ではどんな開発途上国においても、慢性的栄養失調はあるにせよ、飢饉は減っている。一方、多くの貧困層は、生活の必要に迫られて、日本の携帯電話にさえないような送金機能の付いた携帯電話を持っている。これらに象徴されるように、開発途上国の「貧困」の姿は、昔と今では異なっている。貧困の実相が異なれば、それに対処する「開発」の有り様も異なって当然である。

現代の貧困とは何か、現代の開発とは何か、といった問いに対する編者らの見方を、本書に込めたつもりである。これらの貧困・開発の視角がいつまで通用するのか、見極めていきたい。

（やまがた　たつふみ／アジア経済研究所　国際交流・研修室）